

健康文化

或る後期高齢者の視角

高田 健三

今年の春先は暖冬異変とやらで、桜が早く咲き始めたと思ったら、その後急な花冷えが続き、皮肉にも花をいつもよりは長く楽しめて良かったと言う落ちがついた。すると五月には季節はずれの暑さになったり、台風が日本列島に接近して通過するやら、例年より早く梅雨入りするなど、近頃は季節の移ろいに“風情”を感じられない。そんな風に嘆いたりすると、資源や食糧の暴騰、金融の混乱など社会が危機的状态に陥っている時に、何を悠長なことを言っているのかと叱られそうである。しかし私に言わせれば、地球温暖化等による地球規模の気象異常が、日本の四季を狂わせるまでになってきたかとの思いが強い。

その証拠に我が家の庭の住人、コクワガタも、いつもより早く姿を現した。それに今年はヒラタクワガタが加わった。この地に居を構えて三十年になるが初めての事である。自然界の命の環境が乱れ始めていることは間違いない。一方、庭にあるクヌギの老木の樹液が匂い出すと、色々な甲虫類が集まって来て賑やかな集会が始まる。その事だけを見ていると、何も変わっていないように思えるが、地球規模の変化は、“長い時間軸”で観察しないと見過ごして終う事があるのに注意しなければならない。

今年ももうしばらくすると虫たちの季節を迎える。昆虫少年達の目が輝き始めるときである。雑木林の中を、息を凝らして落ち葉を踏む時の緊張感、目当てのクヌギの大木に、大物を見つけた時の興奮、目を凝らして近づき、そっと掌で包むようにして掴んだその一瞬、詰めていた息を一度にフーッと吐く時の、その満足感は言葉には言い表せない。我々の祖先、原人達が獲物を求めて野山を駆け巡り大物を仕留めた時の気持ち(?)が、子供心に蘇る一時である。色々な生き物が棲む里山は子供達にとって、自然と生き物の関わりを体験出来る小宇宙なのである。しかし人間世界は、地球の“劣化”が進んでいると危険信号が出ていても対応が鈍く、このままでは人間が住める環境のキャパシティが“臨界点”に達するのも、そんなに遠い未来ではないかも知れない。

後期高齢者に“格付”された我々昭和一桁に生を受けたけ者は、波瀾万丈の文字では現せないほどの激動の年月を生き抜いて来た。しかし喜びも悲しみも将又憎しみも、時代を遡るに従ってセピア色に褪せて行く。そんな中クワガタを見つけると、少年の頃が懐かしく思い出され、よき時代の里山の景色が目に浮かぶ。追憶は高齢者にとって心安らぐ一時である。しかし、その世界に入り浸って終うと、もう世捨て人同然になって終う。ただ漫然と生きて行けるほど、今の世のなかは寛容ではない。自分の人生を生き切るつもりなら、社会の流れに柔軟に対応しながら、決断を躊躇しないことである。その為には何時でも何処でも何にでも興味をもって行動し、情報を集める努力は怠らない。そう自分に言い聞かせながら一日の時間を使うと、結構忙しいものである。

“一日”が新聞、テレビのニュースから始まるのは、現代人の生活パターンである。この頃は特に政治（身近な法律の制定、変更）、経済（景気、金融）、科学（生命科学、医療技術、IT）関係は精読している。うっかり見落として、不利益を被ったことが何度もある。そんな中で最近、最も感動したのは、昨年十一月、筋肉や肝臓など何にでも“分化”する能力を持つ細胞（iPS：人工多能性幹細胞）の開発に、日本人研究者：山中伸弥京大教授が世界に先駆けて成功した大ニュースである。今回の成功で再生医療は急速に発展し、臓器移植に関わる問題解決も遠くはないであろう。1980年代、両生類（イモリ、カエル）の胚細胞を材料に、シャーレの中で脳、神経、筋肉等の組織を創る研究に熱中していた研究室の当時を思い出して、感慨も一入である。生命科学の発展は正に日進月歩、今や私の思考の範囲を超えているが、新しい発見に感動するだけのコンピテンスは未だ脳の何処かに残っているらしい。

幸いまだ娑婆っ気の方は十分にあるので、その気になれば、下世話なことには体がじっとしていられなくなる。たまには“ちょいわるオヤジ”の気分になってみるのも元気を長続きさせる秘訣である。さもないと、今の医療や年金制度などの改訂の流れでは、“老人”はいつ何時後期高齢者どころか“末期高齢者”扱いにされ兼ねない。ところが近頃時々、朝起きがけに左膝に違和感があつて痛むことがある。終に脚に来たかと思ひ、おそろおそろ整形外科で診てもらったところ、X線画像では骨などに異常は認められないので、特に心配ないだろうと言う。しかし去年ぐらいから左膝関節付近のスジが痛く正座出来な

いと言うと、それは運動不足のせいだと言われてしまった。ズバリ“痛い”ところを突かれたと思った。プールに浸かっての歩行運動をするか、エアロバイクを漕ぐのを推奨してくれた。幸い以前、家内が体重減らし(!)に買ったのがある。よしそれだと思ったが、暑さのせいでのところ未だバイクは漕いでいない。自分の怠惰さには情けなくなる。

この原稿を書き始めてからも、第三次石油ショックの影響で、物価の高騰が止まらない。この六月から八月にかけ、更にガソリンなど日用生活用品が一斉に値上げされる。年金暮らしの高齢者ならずとも、一般世帯にとっても、生計を切り詰めざるを得なくなる問題ばかりである。

しかし週末ともなると、そんな世の中の事には屈託のなさそうな十代、二十代の女性達が街に溢れる。小売業不況の今日、デパートなどはあの手この手で購買欲を誘おうとする。そのせいか、近頃の若い女性達の街着(ファッション)は、私の目には外着(街着)か内着かパジャマかの区別がつかないが多い。孫娘のジャケットなどを見に家内とデパートに行った折、売り子がこれは内着にもパジャマとしても使えますと言う。そう言われれば、色々な種類の“もの”を重ね着(コーディネート)したようなティーンエイジャー達が目にとまった。私には目のピントが定まらない(目のやり場がない)ような服装であるが、彼女たちはファッションの先端を行っている積もりであろう。これが世に言う“名古屋嬢”スタイルかは知らないが、服飾に関して、女性は何時の世でもなぜ、これほど“大胆”になれるのかと不思議に思う。

一方、街角でテレビのインタビューに応えた若者たちは、見た目を良くすることで仕事へのモチベーションアップに繋がるという。確かに一頃よく見かけた膝のすり切れた石擦りジーパンスタイルよりは清潔に見えるが、私には話の辻褄がよく分からない。近頃の政治家は、マニフェストは立派だが、成果は看板倒れのものが多い。格好だけではいい仕事の保証にはならない。成果を上げてこそ一人前のサラリーマンであり政治家である。

新聞や、海外放送のニュースを聞いていると、世界的なインフレや経済不況、地球温暖化がそこまで迫りつつあると警告している。東北地方では、平均気温の上昇に対応するため、ミカンの栽培やリンゴの品種改良(高温耐性)が既に進められている。農家の方が政府や官僚より現実と未来がよく見えている。稲作の減反など農業政策一つとっても、政府はいつも判断が鈍く、時期を失して

いると言わざるを得ない。政財界のお偉方から街のサラリーマンまで、右に倣えでクールビズなどと洒落込んで、会議ばかりやって居る時ではない。

“会議は踊る”（1931）はドイツ映画の傑作と言われる。ナポレオン失脚後を話し合うウィーン会議（1814）は、各国の意見が折り合わず難航し、会議よりダンスなど遊びに費やす時間と経費の方が多かったという。それを評して「会議は踊る、されど進まず」と揶揄した名言から映画の題名をとったと言う。流石に今は、国際会議などでも晩餐会はあっても、舞踏会はないであろうが、これと言った成果も少なければ、実行に移されるものとなると更に少ない。政治家や官僚の知恵と無駄遣いは二百年経っても変わらないものらしい。

それほど気温は高くなくても飽和に近い湿度が続く梅雨時は、肌がべたついたりして誰しも憂鬱な上に、景気も急降下で好い話は何も出て来ない。出るものと言えば医療費、税金に汗ばかりである。暑さ凌ぎのクールビズもいいが、滲み出る汗の対策を怠ると地下鉄の中などで臭ったりしてお洒落も台なしである。オリンピック柔道六十キロ級競技で、金メダル3連覇と言う偉業を成し遂げた野村忠宏六段は、道場の練習で女子ととり合うときは、加齢臭を和らげるためオーデコロンを使うという。さすが世界を舞台にして戦う一流選手は、さり気ないエチケットの心得を、身につけているものだと感心した。

昔、理学部生物学教室に一人の名物先生がいた。その先生は未だ独身ということで、下宿生活の極意は流石と思わせたが、真偽のほどは眉唾物もあった。下着の洗濯はその最たるもので、汚れたら裏返してもう一度着てから洗う。手間も石鹸も半分で済む。今で言う省エネ、省資源の先駆者と言うべきであろうか。その先生が臭っていたかどうかは記憶にない。生きるに一生懸命の時代には、臭いなどはどうでもよかったのである。

近頃、男性用化粧品がよく売れていると言う。戦後最長の“平成景気”の恩恵を受けて育った若中年層が、見た目（視覚的）だけではなく臭い（嗅覚的）にも気を配る余裕が生まれたのであろうか。しかし、臭いの世界は間口が広くて奥が深い。男性は女性ほど香水との付き合いは長くない。汗の臭いを消そうと思って、不用意に安物のオーデコロンなどを使うと、かえって不快な臭いになることがある。体臭にも個人差があり、何を合わせるかは、専門のアドバイザーに相談するしかない。

香水の先進国西欧では、自分の好みに合う匂いを調合してもらう女性もいると聞く。世界でただ一人、“私の匂い”とは、何ともミステリアスである。悪臭の代名詞にもなっているスカトールは、薄めるとジャスミンの香りになるという。匂いはそれほどデリケートなものである。最近、ローズオイルなどを加えたチューインガムなどがよく売れているらしい。食べると体からバラの香りがするという。バラの香りもピンキリであるが、手軽で安く大衆的なところが受けたのであろう。資産格差が広がって、生活に四苦八苦する人が多いというのに、若い女性の服飾、男性の香水、テレビのクイズ番組の氾濫など、大衆文化は百花繚乱である。そのうちに社会の何処かに歪みが溜まってもおかしくはない。カタストロフィーが何時起きるか気になるところである。(2008.6)

(名古屋大学名誉教授)